

# 計画演習 I

## 08 2. 建築のための建築

開講年次：学部3回生後期

[担当教員]

大谷弘明(日建設計) 近井務(大林組)

小幡剛也(竹中工務店)

[Teaching Assistant]

池田明德(A64) 塚越仁貴(A64) 馬場智美(A64)

### ■課題主旨

建築とはなにか。

建築を学ぶあなたたち学生にとって、建築の研究者にとって、そして私たち建築設計者にとって、これは、初源的かつ普遍的な問いである。その答えを探す場のひとつが大学の建築学科であるならば、さて、どんな空間がふさわしいのだろうか。

参照すべき古今東西の書物があり、図面や大きな模型を制作する場があり、木工房とデジタルツールを備えたファクトリーの両方があり、発表やレクチャーの会場となる専用ホールがあり、なにより友人や教員と建築について語りあう場が必要であろう。ときには夜を徹して議論し、制作し、ときには海外から建築家や学生を招いてワークショップをし、さまざまな出会いを誘発する場が望まれる。

建築を考え建築をつくるための建築とはなにか。それは、あなたたちを包み込む豊かな空間を考えることであり、周辺環境と交歓する空間を考えることであり、潜在的クライアントである一般市民に建築の素晴らしさが伝わる空間を考えることであってほしい。

行為をいきいきとしたアクティビティとして顕在化させる、魅力的な内部空間と外部空間をもつこと。1/1のモックアップがつけられる大きな(面積だけでなく高さにも配慮)空間をとること。一般市民と共有できる空間を含むこと。建築は3階以上とする。



国土地理院 地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>) をもとに編集者作成  
課題敷地

### ■概要

敷地は阪急六甲駅に隣接する、線路沿いの区画。

そこに、神戸大学建築学科の設計に特化した施設を設計する。対象者は3回生以上の学部生、大学院生(修士・博士)、留学生、研究者など。研究対象は意匠だけでなく、計画、歴史、環境、ランドスケープなども含むが、全員がここでは設計者であることを前提とする。設計

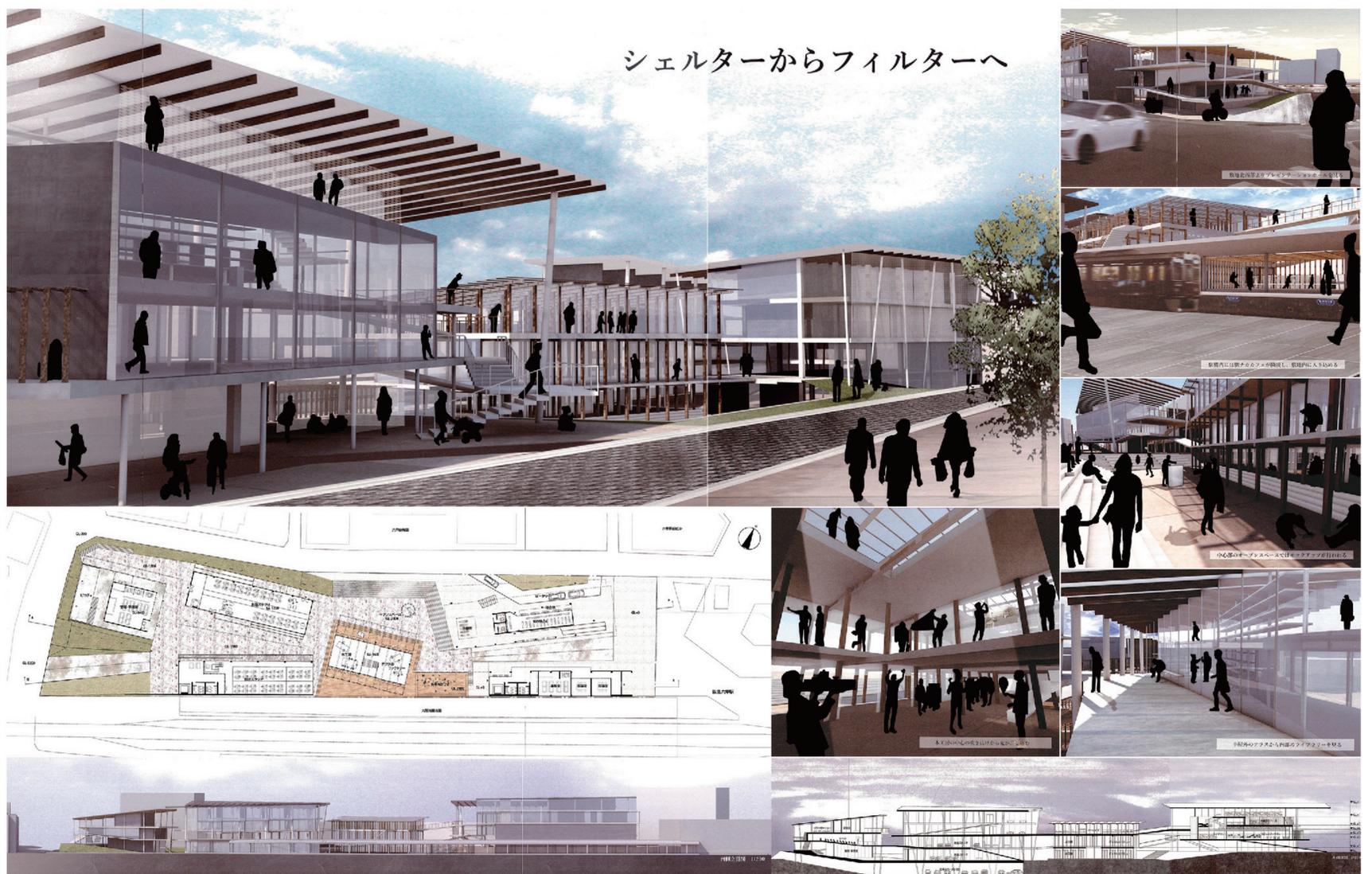
### ■講評会の様子



## シェルターからフィルターへ

井上凌成

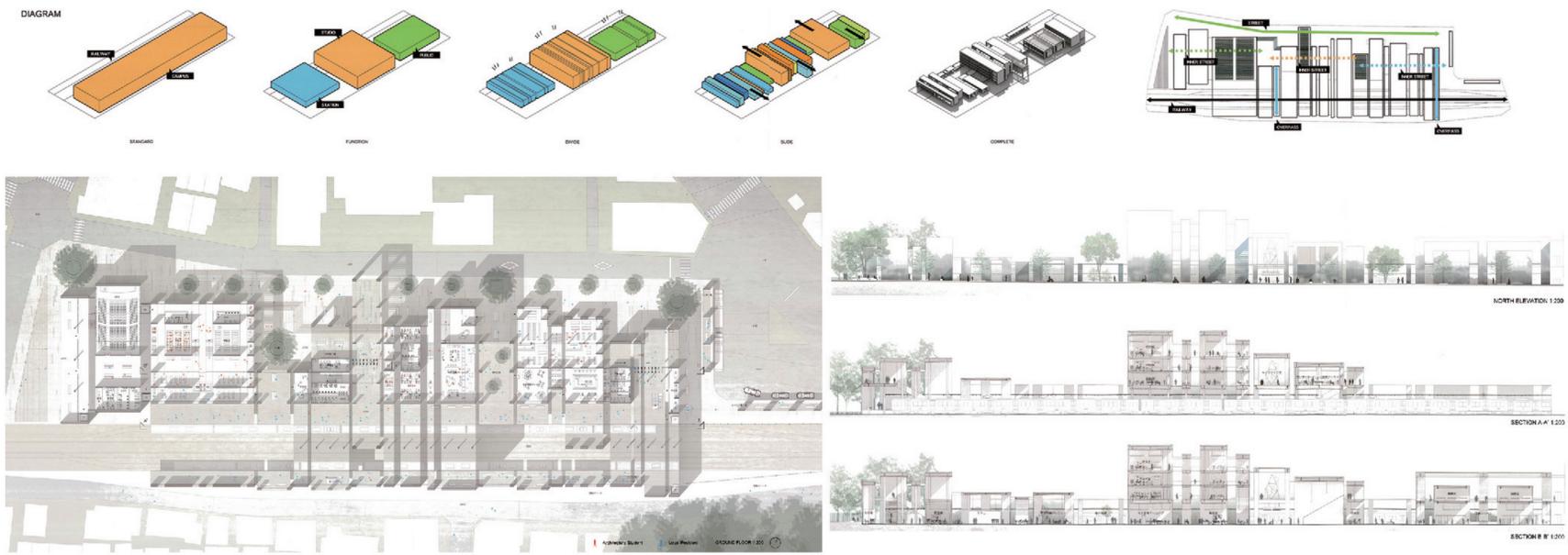
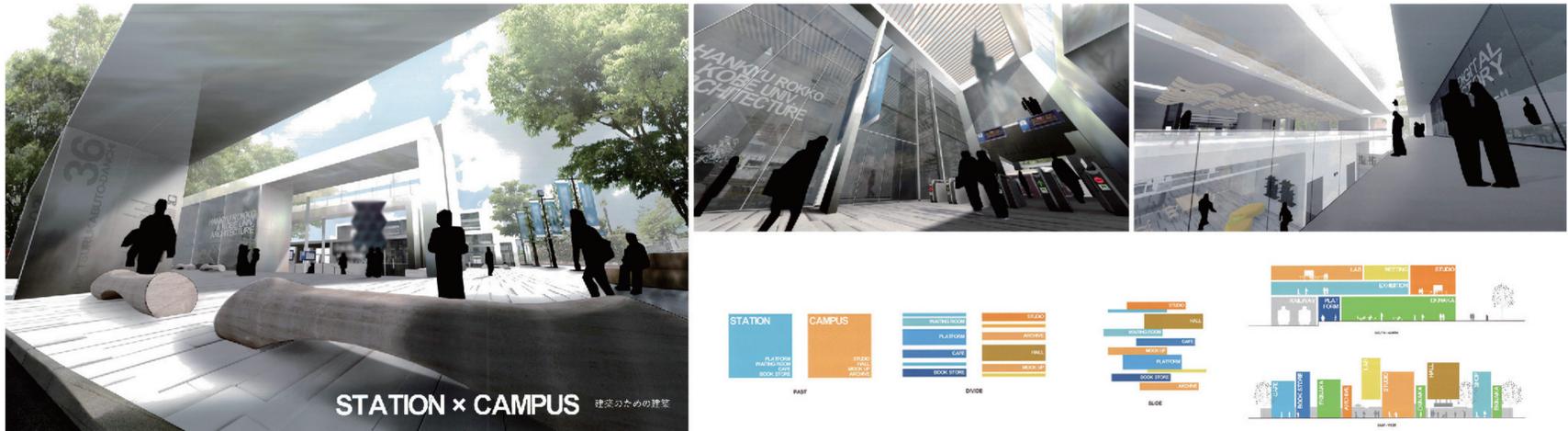
雨風などの外部因子から身を守るための閉ざされた「シェルター」としての建築から、人々の活動を透過させる「フィルター」へと変えることで建築学を発信し、情報社会により失われつつある周囲の小さな変化に気づき、共有するという日本人特有の感性を取り戻す。



# STATION×CAMPUS

越智誠

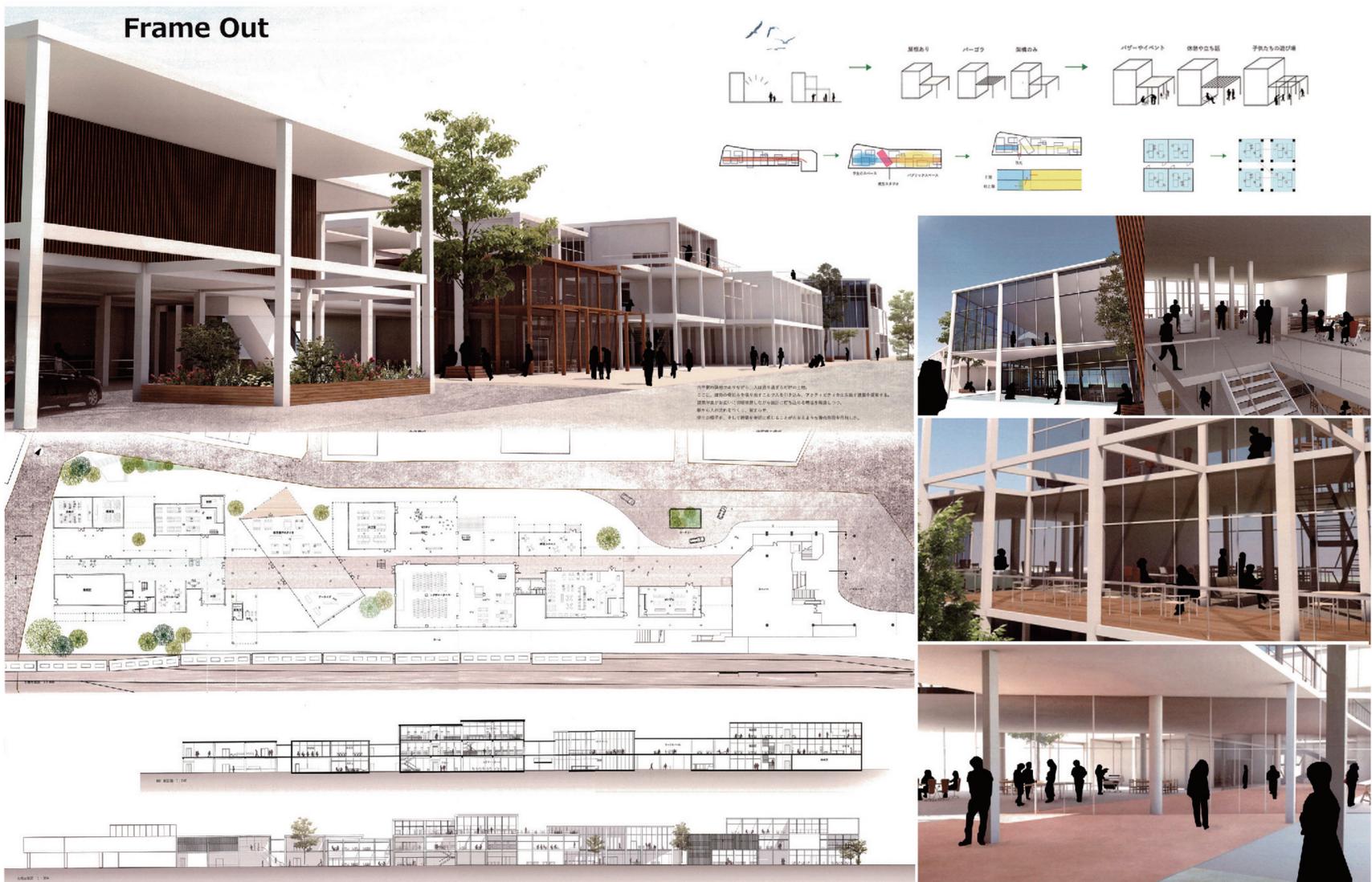
駅 [STATION] と大学 [CAMPUS] に含まれる要素を解体し、門型フレームとして相互に貫入させることで、多用途的で利用者を選別しない新たな公共空間を生み出した。待合室はギャラリーに、連絡橋はプレゼンテーション室に、モックアップ室は展示場に変化する。



# Frame Out

竹田理紗

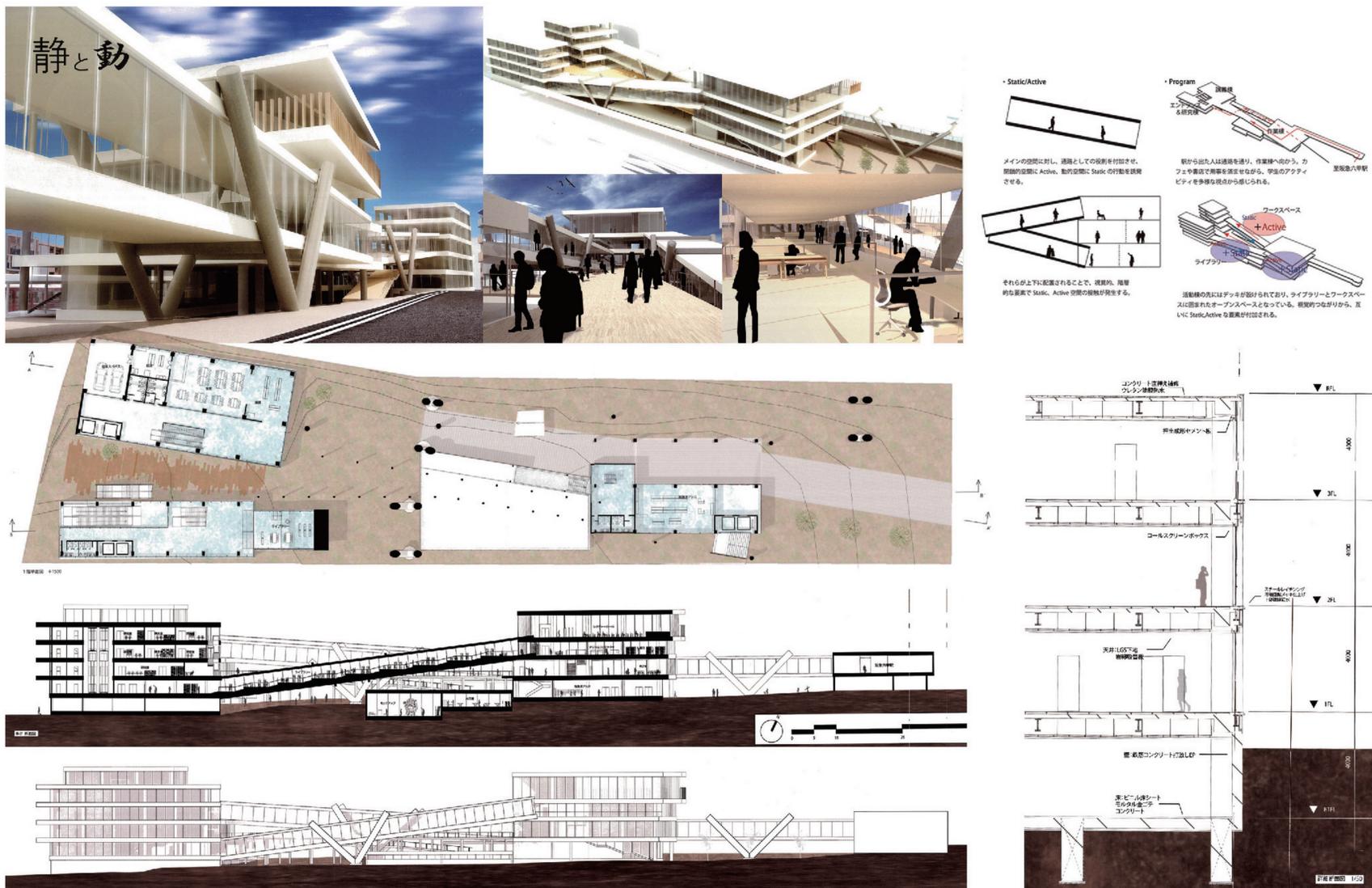
駅横でありながら道は狭く、人の集まらない敷地。建物から柱・梁のフレームを飛び出させることで、圧迫感なく領域性をつくり、人を引き込むことを目指した。一般と学生の領域を分けつつも、地域の人々に建築を身近に感じてもらえる施設にしたい。



## 静と動

米倉良輔

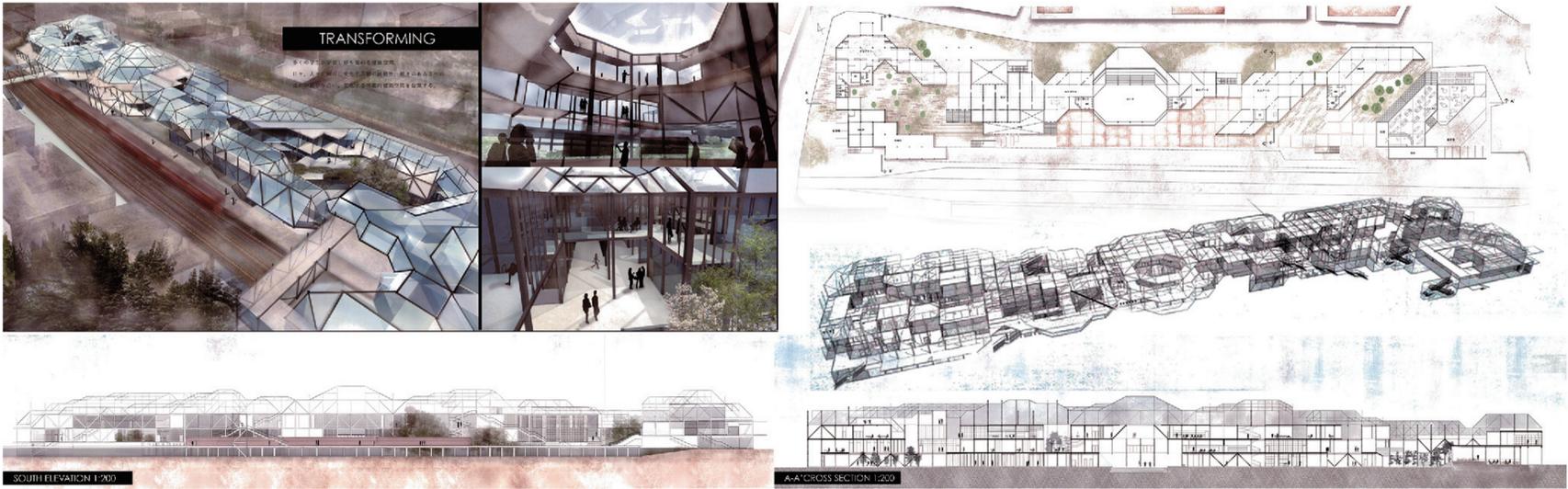
私たちにとっての建築とは、閉空間に籠り自らのイメージを形にすることなのだろうか。人が立ち止まり、留まる空間を「静」の空間、人の行き来が絶えない空間を「動」の空間と定義し、それぞれに互いの要素を付加させることで大学と駅前空間の活性化を促す。



TRANSFORMING

大脇春

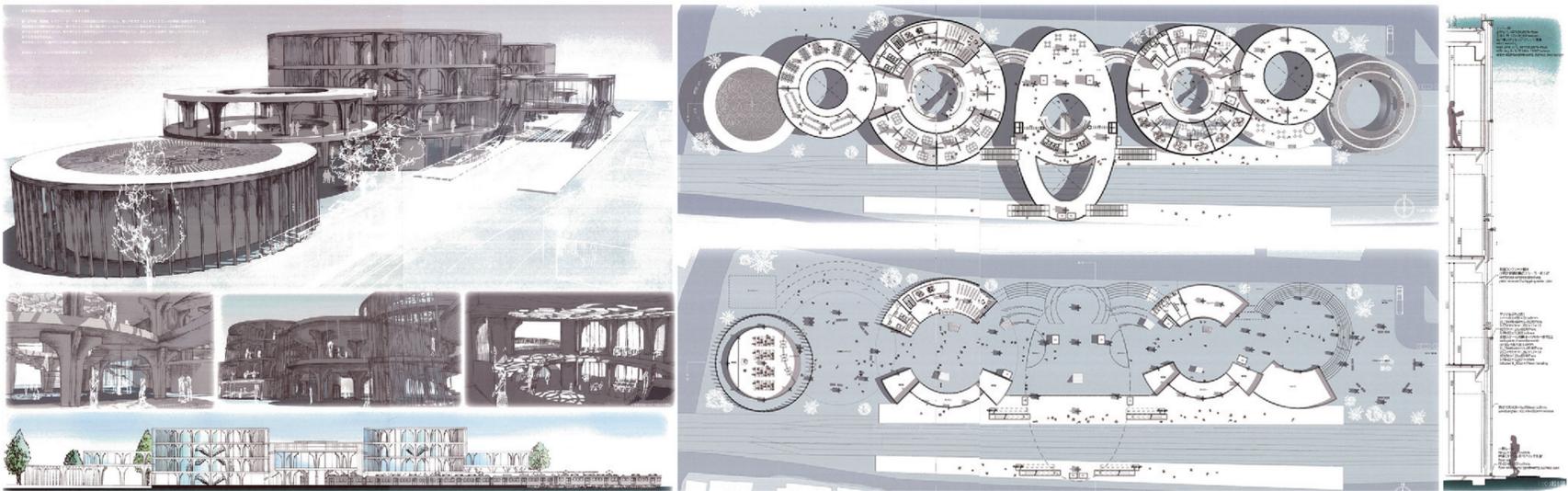
日々多くの人が利用する駅前空間、多様な創造活動が行われる大学、流動的な 2 つの空間を 4x4 の単位空間に置きかえて立体的に交差させる。用途や利用者、利用時期によって造形が変化し新しい空間が生まれていく”建築”を提案する。



The circular properties of a traffic line - 縁をつなぐ動線 -

草川望

動線が円になると隣の建物との距離が絶えず変化する。駅利用者が改札まで歩くと隣の建築スタジオの棟が近づいて離れていく。何気ない日常のワンシーンに異なる空間が写り込む。様々な人の円の動線が繋がって新しい交流が生まれる空間を提案する。



見つけ、集まり、溜まる建築

田中里奈

建物を囲むことでできる隙間に居場所をつくることで人々が好きな場所を見つけ集まり溜まり、敷地ににぎわいをもたらす建築をつくる。建築学生と地域の人が使うボリュームを絡めることで視線の交流を生み、それぞれの居場所に特徴も与える。



SHOW WINDOW

前田洋佑

視覚を通して、学生が意欲的に建築を学び、「建築とは何か」を外部の人々へと発信する空間を提案する。ガラスのファサードに内包され、ルーバーで覆われたボリュームからは学生のアクティビティが滲み出す。

